

渡忠秋年譜稿（二） 明治編・上

田中 仁

はじめに

近世後期から明治にかけて京都を中心に活躍した桂園派歌人・渡忠秋は、明治以降、歌道御用掛として宮内省に出仕して、八田知紀や高崎正風といった薩摩出身の桂園派歌人たちとともに、明治初期の宮中歌壇の礎を築いた重要な歌人の一人である。本稿は、拙稿「渡忠秋年譜稿（一） 明治以前編」の続稿として、渡忠秋の明治以降の事績（とくに宮内省歌道御用掛辞職まで）をまとめることとする。

〔凡例〕

一、この年譜は、近世後期に活躍した桂園派歌人渡忠秋の事績を年次順にたどることを目的とする。各項目の記述は、年月日、事績・内容、出典、参考文献の順とし、出典については（ ）、参考文献は「 」で示した。参考文献

は初出のみ、出版社名・所載誌名・刊年を記し、二度目からは省略した。

一、通常の項目は○印、特に重要な項目に◎印で記した。

一、年は判明しているが月日が不明な項目については□印で記した。

一、日付の確定が難しいものについては△印を記した。

一、この年譜では、存命中の事績に限らず、没後の関連事項についても記述した。

一、なお、極力原資料にあたることを前提として作業を進めたが、やむを得ず原資料にあたるのが困難な場合には、引用文献を明記した。

一、暦の算定に関しては『日本暦日便覧』(汲古書院)を参照した。

慶應四／明治元年(一八六八) 戊辰 五十八歳

○三月二十一日、大坂行幸に際して歌二首を詠む。〔『桂蔭拾葉』四〕

□春、松尾宗古(茶人、松尾流六代、安政三年四月没)の十三回忌追悼歌を詠む。〔『桂蔭拾葉』三〕

○五月二十日、このころ忠秋の依頼によって高崎正風が山部赤人事跡について周旋する。〔忠秋宛正風書簡〕〔兼清〕

□六月、八田知紀上京送別の歌を詠む。〔『白雲日記』上〕〔兼清〕

○七月六日、このころ宿願二十年の赤人顕彰に努める。〔宛名不明忠秋書簡〕〔兼清〕

○九月六日、崇徳天皇神靈御還遷に際して歌を詠む。〔『桂蔭拾葉』四〕

○九月十八日、後鳥羽天皇・土御門天皇・順徳天皇の三帝ほか南朝諸帝の神霊還京を建白する。（『太政類典』） *明
治六・七年、三帝神霊が大阪水無瀬神宮に合祀される。

○九月十八日、比叡山に紀貫之の墓を探訪する。（紀貫之之石碑）「兼清」

□初冬、「禁庭残菊」の歌を詠む。（『桂蔭拾葉』一）

○十月十三日、明治天皇の第一回東幸に供奉する知人への饒別歌を詠む（翌明治二年の第二回東幸か）。（『桂蔭拾葉』
四）

□十一月、紀貫之遺跡に石碑を建立する。（紀貫之之石碑）「兼清」

□十一月、大田垣蓮月の家集『海人の刈藻』の序文を記す。（同書）

□この年、賀茂真淵の百年忌に「寄国祝」の歌を詠む。（『桂蔭拾葉』四）

明治二年（一八六九） 己巳 五十九歳

□春、明治の治世を称える歌を詠む。（『桂蔭拾葉』一）

□春、「春従東来」の歌を詠む。（『桂蔭拾葉』一）

□夏、東京に上る大國隆正の留別会で「夏旅」の歌二首、当座題「夏祝」の歌を詠む（翌明治三年か）。（『桂蔭拾葉』
二・三）

□十一月、新嘗祭の歌を詠む。（『楊園詠藻』二）

□この年、千家尊澄（出雲国造、号松壺）の還曆祝歌「寄松祝」を詠む。（『桂蔭拾葉』三）

□この年、那須賢直(讃岐高松藩士、号奈与竹乃屋、渡忠秋門、明治三十三年七十七歳没)の四十歳の祝歌「寄竹祝」を詠む。(『桂蔭拾葉』三)

明治三年(一八七〇) 庚午 六十歳

- 春、還暦を迎え、その感慨の歌を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- このころ清水坂陶器師三代清水六兵衛に富士山の香炉を造らせ、その歌一首を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- 秋、妓王寺境内に寿碑を建立する。(同碑)「兼清」
- 秋、前成就院忍向(清水寺成就院月照、安政五年没)十三回忌追悼歌二首を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- 十月、福崎季連・西村政行と大井川で紅葉見し、歌を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- 十月、このころ西村政行・小山敬容・河瀬格誠らと東山光雲寺に遊び、歌を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- 十月、皇太后宮の修学院離宮行啓に際し、修学八景歌を詠み奉る。(『桂蔭拾葉』三)
- 十一月一日、吹上御殿で歌御会が催されたことについて歌を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- 十一月、新嘗祭の歌を詠む。(『桂蔭拾葉』二)
- 十二月二十日、三条家家人丹羽正庸の東行に餞別歌一首を詠む。(『楊園詠藻』二)
- 十二月、明治天皇の京都還幸を待ち望みつつ歳暮の歌を詠む。(『桂蔭拾葉』二)
- 冬、疋田千益(香川景樹門、明治二年十一月没)一周忌追悼歌「向炉惜昔」を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- この年、三好元好(讃岐高松藩士、号かず竹のや、渡忠秋門、大正二年九十三歳没)の五十歳の祝歌「寄竹祝」を

詠む。(『桂蔭拾葉』三)

明治四年(一八七二) 辛未 六十一歳

- 正月、忠秋家月次歌会で神楽岡若葉の歌を詠む。(『高畠式部全歌集』)「兼清」
- 春、佐賀の古川松根が殉死したことを聞いて追悼歌を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- 春、「花為友」の歌を詠む。(『桂蔭拾葉』一)
- 三月二十八日、竹内享寿の七回忌追悼歌を詠む。(遠藤弥四郎氏蔵短冊)「兼清」
- 同日、竹内享寿の七回忌追悼歌「暮春夢」の歌を詠む。*「いつの年なりけん彼の寺(東寺)のかきつばたのころおどろかししことなど思ひ出でて」とあり。(『桂蔭拾葉』三)
- 四月一日、河瀬格誠に誘われ大原の江文明神祭に行き、歌一首を詠む。(『楊園詠藻』三)
- 秋、高畠式部ら七、八人と嵯峨で紅葉見をする。(『高畠式部全歌集』)「兼清」
- 九月十二日、尾崎六夫の薦めにより「詠嵐山堰水歌」の長歌一首を詠む。(『楊園詠藻』三) *『滝のしづき』『京華新誌』にも所収。某氏添削懷紙あり。
- 十月、三条実方十三回忌に小倉山廟所へ詣で、追悼歌二首を詠む。(『桂蔭拾葉』三)
- 十一月十七日、大嘗祭に際して歌四首を詠む。(『桂蔭拾葉』二)
- この年以前、井上文雄(明治四年没)の歌を伝え聞き、感慨の歌二首を詠む。(『桂蔭拾葉』四)
- この年、三条実美が太政大臣となり、その祝歌を詠む。(『桂蔭拾葉』三)

□この年、後嵯峨天皇六百回忌に追悼歌を詠む。（『桂蔭拾葉』三）

□この年、長沢伴雄十三回忌に追悼歌を詠む。（架蔵短冊）

明治五年（一八七二） 壬申 六十二歳

□このころ秋園古香七十歳の祝歌を詠む。（『滝のしぶき』下）〔兼清〕

□この年、八田知紀が同年六月の筑紫巡幸に先立って『天降真跡考』二巻を献上したことを祝う歌一首を詠む。（『楊園詠藻』三）

○七月十五日、精霊祭廃止に際し十五夜の月を歌に詠む。明治政府はこの年から明治十六年まで文明開化を妨げるものとして送り火を含む盂蘭盆会の行事を禁止する。（『楊園詠藻』二）

○十一月一日、粟田山の療病院開業式を喜び祝う歌三首を詠む。（『楊園詠藻』三）

明治六年（一八七三） 癸酉 六十三歳

○正月一日、新年年頭の歌二首を詠む。（『楊園詠藻』一）

○五月二十九日、午睡の夢の感慨に歌一首を詠む。（『楊園詠藻』一）

□夏、中秋の詠史歌集『読史有感集』一巻を刊行する。（同書）

□八月、遠藤千胤編『一窓集草稿』初編が刊行される。楊園門下の歌集で、中秋の歌六首を収録する。*妻後瀬の歌

一首あり。(同書)

○九月二日、八田知紀が逝去し、追悼歌一首を詠む。(『楊園詠藻』三)

明治七年(一八七四) 甲戌 六十四歳

◎四月五日、宮内省雇歌道御用掛を拝命する。(『心の華』三の九) [兼清]

○四月十日、正風社歌会(於橋場村松平慶永亭) 兼題「河辺花」一首を詠む。中山忠能・綾小路有長・三条西季知・嵯峨実愛・伊達宗城・池田慶徳・毛利元徳・亀井茲監・福羽美静・山内豊誠・松平忠敏・渡忠秋・松平慶永の十三名。*ただし、忠秋のみ当座探題の歌は収録されていない。(『学習院大学図書館蔵『明治四年正月御歌会留』)

□八月、宮中月次歌会で新題「蒸気船」の歌一首を詠む。(『楊園詠藻』三)

□十一月、宮中月次歌会で新題「電信機」の歌一首を詠む。(『楊園詠藻』三)

○十二月十五日、父の十七回忌の追悼歌を詠む。(渡浜主君十七年祭追慕手酬) [兼清]

明治八年(一八七五) 乙亥 六十五歳

○正月十八日、毎月三の日を定日として宮中御歌会が催され忠秋も陪席する。(『明治天皇紀』第三) [兼清]

□五月、宮中月次歌会で新題「練兵」の歌一首を詠む。(『楊園詠藻』三)

□八月、宮中月次歌会で新題「瓦斯灯」の歌一首を詠む。(『楊園詠藻』三)

- 十月九日、仙洞御所阿古瀬淵に紀貫之石碑を建立する。(同碑)
- この年、遠藤千胤が紀貫之遺跡碑建築現場の写真とともに歌一首を送ったのに対し、返歌一首を詠む。*千胤は京都不在の忠秋に代って建碑願書の提出などの諸務を取仕切っていた。(『楊園詠藻』一)
- この年、十月以降、紀貫之遺跡碑建築竟宴歌会が催され、兼題「水辺歎冬」の歌六首を詠む。(『楊園詠藻』一)
- この年、黒田清綱の月次歌会で三首の歌を詠む。(『庭たつみ』上)「兼清」

明治九年(一八七六) 丙子 六十六歳

- 二月十七日、鶴久子に宛てて葉書を出す。*本所松井町一丁目九番地／鶴久子殿／自新橋内幸町一丁目／三条殿邸内／渡忠秋とあり。(鶴久子宛中秋葉書*架蔵)
- 三月十日、宜野湾朝保編『沖繩集二編』の跋文を記す。(同書)
- 五月、宮中月次歌会で新題「望遠鏡」の歌四首を詠む。(『楊園詠藻』三)
- 八月、宮中月次歌会で新題「馬車」の歌三首を詠む。(『楊園詠藻』三)
- 九月、高崎正風編『埋木廼花』が刊行され、歌八首が収録される。*妻の後瀬の歌一首あり。宮内省十等出仕御歌掛とあり。(同書)
- 同月、宮内省を辞職し、京都へ戻る。(村山松根『忘貝』)
- 明治天皇の奥羽巡幸に供奉した近藤芳樹に歌一首を送る。(『楊園詠藻』三)
- 東京在住中、鹿兒島種子島の門人らの訪問をうけ、彼らの歌集『熊毛集』草稿を閲覧する。(同書跋文)

- 東京在住中、大田垣蓮月から焼物の筆立てを贈られ、その返歌一首を詠む。〔『楊園詠藻』三〕
- 宮内省辞職後、明治天皇の写真を下賜されたことを喜び、歌一首を詠む。〔『楊園詠藻』三〕
- 特旨により正八位に叙せられる。(墓碑文)
- 細辻昌雄が島原の花窓大夫(のち夏子)を嫁に迎えたことへの祝歌を詠む。〔「細辻家感懷紙」〔兼清〕
- この年、北野天満宮の祭日に『須磨記後案』序文を記す。(同書)

(つゞく)

(日本語日本文学科 助教)